

〈文化史学会第十一回大会発表要旨〉

アナール学派と地域研究——第一世代を中心に——

田 畑 久 夫

アナール学派とは、雑誌『アナール』を拠点として、社会・経済・文化の歴史について研究を進めるフランス歴史学研究者の集団のことである。このアナール学派の主張する歴史学は、従来の歴史学に一大革新をもたらした「新しい歴史」学と称され、わが国の歴史学界においても多大の影響を与えてきた。アナール学派には二つの目標があった。第一点は、歴史家、経済学者、社会学者を分かち、それぞれの専門領域に隔離していた専門精神を統合したこと——歴史における人間科学の統合と称される——、つまり学際的な研究を目標としたこと。第二点としては、第一点で示した学際的な研究を方法論あるいは理論的な論考ではなく、実例と事実による分析を旨としたことである。ヴィダル・ブラーシュを祖とするフランス地理学は、伝統的に学位論文を専門とする地理学分野の研究ではなく、特定地域を総合的に論述する地域研究の成果によって取得してきた。このようなフランス地理学の特色は、アナール学派の代表的な提唱者であるフェーブルとブロックが共に、地理学に造詣が深いという関係もあり、とりわけ第一世代のアナール学派の歴史研究には、例えばブロック著『フランス農村史の基本性格』にみられるように、地域を重視する地理学的観点がみられる。

日露戦争の「神話」——日露戦争とその後の日本社会——

千 葉 功

本報告は、日露戦争への見方が日露戦後、時代に合わせてどのように変化して行ったかを分析するものである。

日露戦争中においては、国民の熱狂と、軍、特に海軍の情報操作があいまって「軍神」が誕生した。また、提灯行列を「国民の元気の源泉」とみなす新聞は、熱狂を後押しする。そして、これら熱狂は、観艦式や観兵式などの帝国のページェントに吸収される。

しかしながら、一過性の熱狂が過ぎると日露戦争の記憶は風化する可能性があり、それを食い止める働きをしたのが国定教科書であった。そして、一九二〇年代末の社会思潮の「悪化」と、満州事変後の軍国主義的趨勢は、日露戦争の記憶を大々的に呼び覚ました。

一九三〇年代に人口に膾炙した本多熊太郎の『魂の外交』は小村外交の語りを独占するものであったが、その中で語られる内容は同時代的な朝鮮・満州観を遡及的に小村外交へ投影した内容であった。

また、同じころ始まった日露戦争の「科学的」研究も、同時代の日満経済ブロックという視点に影響されたものであった。その意味において、『魂の外交』と前提を同じくしつつ、善悪の評価を反転した関係にあった。

すなわち、日露戦争観は時代の産物そのものなのである。